

初めてロンドンで会ったとき

野 中 涼

私が初めてロンドンのパブでマードック女史に会ったのは1971年6月15日（火）だから、彼女はちょうど1か月後に52歳の誕生日を迎えようとしていたときである。レスター・スクエアの近くのパブで、‘public house named Duke of Wellington’ と彼女はあらかじめ手紙で知らせてきた。

約束の時間に彼女は黒ずくめの服装で現れた。きびきびした軽快な身動きで、ブランデーの小さなグラスを2個、カウンターからテーブルに持ってきて椅子に腰をおろすと、ハンドバッグの開いた口におつりのコインをポイと投げこんだ。

私はそのころ創作過程に関心をもっていた。彼女は毎日、午前中は10時から11時45分まで、午後は4時から7時まで、それぞれ約3時間、書斎の机で very regularly に座って書いている、ということだった。

「ただ、最近、右肩から痛みはじめて、だんだん手で書くのがむずかしくなった」と言うので、ヘンリー・ジェイムズの名前をあげると、「ああ、人に口述筆記させる。それは私はできない」と言って、農婦のようながっしりした右手の指をひろげてみせた。しかし ‘Arthritis’ という単語を教えてくれるとき、黒い細身のボールペンと紙片を私に渡し、スペリングを口述筆記させて、“That’s it. Good.” と言った。

それから Irene Alice は母親の名前だとか、‘the nice’ と呼ぶのは kind, generous, but ego-centric persons のことだとか、どの作品の登場人物もすべてフィクションで現実のモデルは一人もいないとか、彼女は真剣な顔つきで、私の用意していた些細な質問にいちいち直截簡明に答えてくれた。

The Bell の中の一場面、車を降りたドローラがプラットホームで両手から蝶を飛び出させる。私は思いきって「あれは印象的なイメージで

した。とても面白い。あの素直な人物の完璧な性格描写になっている」と言ってみた。彼女は一瞬かすかな笑顔らしい表情をみせて、「しかし完璧すぎ、面白すぎるのは、本当はよくない。嘘が感じられないか、too artificial で」と言って、また真剣な顔つきになった。

禪とは何かという話になったとき、私が「要するに常識のクリシェを超える一種の認識方法でしよう」というようなことを言ったので、どうやら、これは話し相手にならないな、と思ったらしい。「フィリピンで鈴木大拙に会おうとした。ところが、ちょうど亡くなられて、会えなかった」といかにも残念そうにつぶやいただけである。

それから『源氏物語』は「すばらしい傑作で、ときどき読んでインスパイアされる」と言って、えらく感激している様子だった。「ウエーリーの翻訳の文体は原作の文体と同じだろうね」と訊くが、私はまったくの浅学菲才、傑作の英訳本を見てもいなかったし、原作でさえいわゆる桐壺源氏にすぎなかったから、「たぶん同じだろうと思う、あのくねくねしたエレガントな文章は」などと口ごもるほかなかった。

私はほの暗いパブの一隅で、40歳近い自分の知識のあまりの貧しさを思い知ると、ああ、これではいけない、とみじめな気持ちになった。それでも彼女が、ふと思いついたように「今、日本の中世の宮廷を場面 to very imaginary drama を書いている。登場人物にふさわしい名前をつけたい。それを教えてもらえないか」と言い出したとき、私は「よろこんでお手伝いしたい」と答えた。

そこで彼女は、会見はこれまでというように、開けっ放しだったハンドバッグをカチッと閉じた。そして私が口をつけなかったグラスのブランデーを “May I ?” とか何とか言うような小声をだして飲みほし、なぜか「あと5分ほどここに留まっていたもらいたい」と言うと、魔女のように

飄然とパブの外へ姿を消した。

私はグリニッジ・パークの東側の小さいメゾネットに妻子と住み、電話がなかったので、オックスフォードに住む彼女と何度か手紙のやりとりをした。彼女はかなり自分勝手にせっかちだった。プロットも人物の役柄も教えずに、ただ將軍とか謀反者とか王女と書いてくるだけだったから、私はほとんど当てずっぽうに思い浮かぶ名前の漢字、発音、意味合いなど、80名か90名くらいのリストを作って送りとどけた。

礼状に‘Let us keep in touch.’とあった。しかしどの名前をどう使ったかの説明はなかったし、翌年その戯曲が *The Three Arrows* の題名で上演され、さらにその翌年に書物にもなったらし

いが、私にはなんの音沙汰もなかった。

もともと、私は1972年の暮れにはギリシャのアテネに移り住んで、3か月ほどソフォクレスやエウリピデスについて調べ、帰国してからは大急ぎで日本の古典文学を読みあさり、いつからともなく比較文学的な研究にうつつを抜かすようになった。

戯曲本を私が手にしたのは何年もずっと後のことである。農地騒動の首謀者ヨリミツや將軍ムサシ、皇女ケイコ、法皇トクザンなどが登場するけれども、もう記憶がうすれて、私が提供した名前をそっくり利用したものかどうか、分からない。あるいは別にどなたかが選択や修正を示唆してあげた結果なのかもしれない。